

～さっぽろ・消えた町角～

朝倉賢(日本放送作家協会北海道支部長)

陸橋はテーマパーク

学生時代を札幌で過ごした知人が尋ねてきた。二十年ぶりだという。

「駅周辺がすっかり変わって、まるで札幌が消えてしまったような感じだね。大学の構内には少し面影が残っていたけれど」

知人は西五丁目の陸橋を渡って母校の北大へ行ってみたいらしい。かつての通学路だったという。

鉄道が高架になり、線路をまたぐ西五丁目の陸橋が撤去されたのは平成元年のことだ。かつてこの橋は、木造の札幌駅と一緒に、札幌のランドマークといってよかった。元々札幌駅は明治時代、市街地の北の外れに造られたものだった。それが、人口の増加などで駅北の街が伸びて行き、また列車の本数や入れ替え作業も増えたため、踏切の渋滞を防ごうと、昭和七年に立体交差の陸橋を造ったものだ。

札幌は平野にできた町だ。今のように市街地は広がっていなかったから、坂らしい坂は無かった。だから、駅脇の陸橋は全く珍しいものだった。

橋の欄干から西を眺めると、線路が枝分かれして広がっているのが見え、その北側に木造の家が密集していた。今のヨドバシカメラのあたりだろうか。小さな宿屋らしい二階建てがあったり、駅弁を作る食品工場があったりして、それらを橋上から見下ろすことができたのだった。平坦な街に住んでいると、他人の家や暮らしを見おろすなんてことはほとんどない。その上、汽笛と一緒に黒い煙や湯気を上げて汽車眼の下を走ってくれる。橋の反対側、東の欄干から見おろせば、今度は駅の構内。列車が停まり、人が乗降し、赤帽が荷物を運び、駅弁売りが弁当を盛り上げた平たい箱を肩からぶら下げて売り歩く。

札幌の子供たちにとって陸橋はまるでテーマパークのように楽しい存在だった。

子供ばかりでなく、陸橋を歩く人も、電車に乗って通勤している人さえ、陸橋にさしかかると、ちらりと駅構内を眺めて見ていたのではないだろうか。

「道庁正門あたりから北がまっすぐ見えるのは、何とも不思議よねえ」と知人は消えた陸橋を惜しんでいた。